

小学生のメディア・リテラシー育成のための単元モデル

The Unit Model for Media Literacy Training of A Schoolchild

～紹介・主張のためのビデオ・Webページ作成の学習を通して～

Through The Study of Video and Web Page Creation for Introduction and Opinion

高橋 伸明 ¹⁾	中村ひとみ ²⁾	前田 知之 ²⁾	春名 淳子 ²⁾
Nobuaki TAKAHASHI	Hitomi NAKAMURA	Tomoyuki MAEDA	Atsuko HARUNA
笠行 和美 ²⁾	文箭 敏 ²⁾	平松 茂 ³⁾	堀田 龍也 ⁴⁾
Kazumi KASAYUKI	Satoshi BUNYA	Shigeru HIRAMATSU	Tatsuya HORITA
1)笠岡市立中央小学校 Chuo Elementary School		2)笠岡市立金浦小学校 Kanaura Elementary School	
3)岡山県情報教育センター Okayama Pref. CIE		4)静岡大学情報学部 Faculty of Information, Shizuoka Univ.	

<あらまし> 小学校高学年児童に対して2年間にわたりメディア・リテラシー教育を実施した。1年目にどのような力が育ったかということを目録や発言を中心に分析し、その反省をもとに「メディア・リテラシー育成のための単元モデル」を作成した。そしてそのモデルに従って実践を行った結果、児童のメディア・リテラシーに高まりが認められた。

<キーワード>メディア・リテラシー モデル 情報の科学的な理解 制作者の意図 評価の観点

1 2000年度の実践の概要と課題

メディアが伝える情報を批判的に読み解いたり、メディアを効果的に活用して情報発信したりする力を育成するために、2000年度小学校第5学年児童に対してメディア・リテラシー教育を実施した。

(1) カプトガニを題材にWebページ作り等を通して交流学習したり、絶滅する・しないの立場に分かれてビデオ作品を作り、制作者の意図と表現効果との関連を学んだりした。(2) 児童はWebページを作る中で、見出しに込められた意図や写真の表す意味の重要性等に気づけなかった。ビデオ作品作りでは、表現効果を用いた意図が不明瞭だったり、他の作品を分析する観点ももてなけなかったりした。

(2) のことから、児童が情報の特性を科学的に理解する学習を行っていないことが問題点として上がった。そのためWebページやビデオ作品に、自らの意図を明確に表現できなけなかったり、内容や構成の工夫と意図とを結びつけられなかったりしたものと考えられた。映像・音声・文字・写真等で構成された情報にはそれぞれ固有の特性がある。メディア・リテラシー教育では、それらを知識として身に付け制作者の意図を分析的に読み取っ

たり、自らも特性を効果的に活用して情報を制作したりする活動が必要であるととらえた。

2 メディア・リテラシー育成のための単元モデル

問題点を解消するために、図のようなメディア・リテラシー育成のための単元モデル(以下「モデル」と記す)を作成した。留意点を以下のように考えた。

(1) 情報の科学的な理解

- ・Webページやビデオ作品の制作前に情報の特性を科学的に理解する学習を行い、情報を分析的に読み取る体験を重ねておく。
- ・制作活動の中で、自らの意図とそれを効果的に表現するための情報の特性とを結びつけ、繰り返し自己評価する場を位置付ける。

(2) 相互・外部人材(専門家)による評価

- ・Webページやビデオ作品の制作過程で、児童自身が観点を作って繰り返し相互評価を行い、取材・編集を継続的に実施する。
- ・専門的な知識や経験をもった外部人材からの評価を受け、再取材・再編集を行う。

3 2001年度の実践

モデルに基づいて実践を行った。対象は笠岡市立金浦小学校5、6年児童91名で、総合的な学習の時間を61単位時間活用した。その

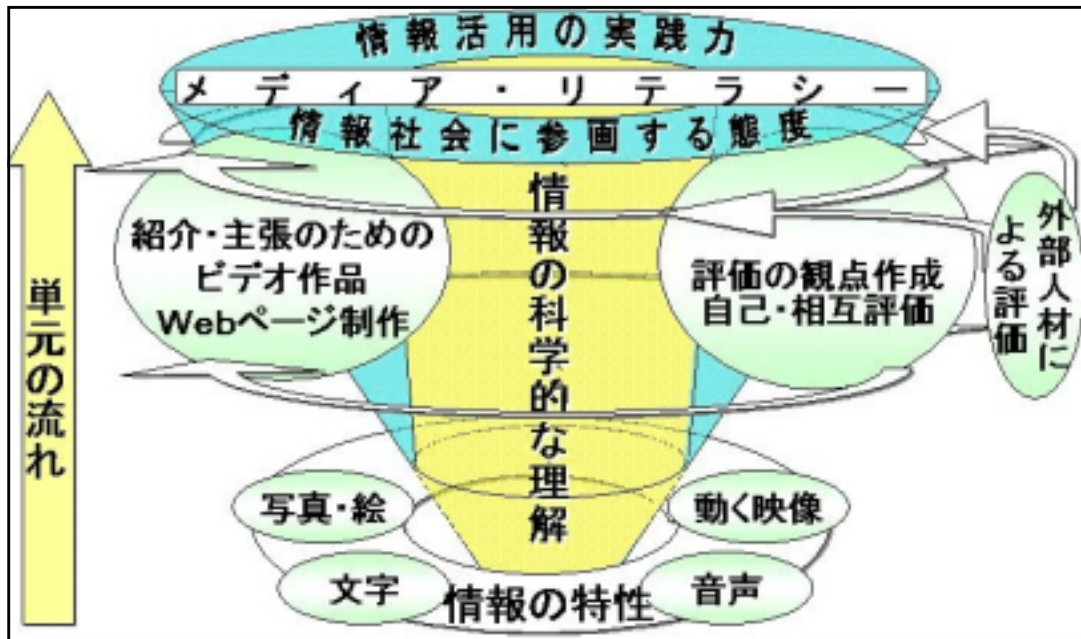


図 メディア・リテラシー育成のための単元モデル

結果以下のような成果が見られた。

(1) 情報の科学的な理解

- ・ビデオ作品の審査会で制作者と質問者が行ったやりとりに、映像や音声もつ特性に目を向け制作者の意図に言及する発言が数多く見られた。情報の特性を分析的にとらえる体験を重ねた成果と考えられる。
- ・Webページやビデオ作品の内容・構成に、情報の科学的な理解に基づいた工夫が数多く見られた。制作過程の節目で「表現の工夫とその意図」を振り返る記述をたびたび行った成果と考えられる。

(2) 相互・外部人材(専門家)による評価

- ・意図を明確に伝えるために必要な表現の仕方を工夫しながら再取材・再編集を行い、作品を仕上げた。児童自身が評価項目を作り相互評価を繰り返した成果と考えられる。
- ・外部人材が、教師に欠けていた視点で作品に対する評価をしてくださり、効果的な再取材・再編集の活動へ結びついた。専門性の高い示唆が与えられた成果と考えられる。

4 結論

モデルを作成・実践したことは、児童のメディア・リテラシーに高まりが見られたので有効だった。特に以下の点が明らかになった。

- ・情報の特性を科学的に分析・理解する学習を行った後にWebページ・ビデオ作品の制作を位置付けると、意図的に情報の内容

や構成を工夫できるようになる。また、作品を評価する観点ももてるようになる。

- ・Webページ・ビデオ作品の制作過程で、「表現の工夫とその意図」についての自己評価を取り入れると、情報の特性を有効に活用した作品作りができるようになる。
- ・児童自身が評価項目を作り相互評価を繰り返し行くと、意図を明確にした表現を目指して再取材・再編集を行うようになる。また評価の観点にも広がり・深まりが生じる。
- ・専門家等の外部人材に作品を評価していただくと、教師にはない観点から示唆が得られ効果的である。また、児童の再取材・再編集への意欲も高まりやすい。

5 今後の課題

今回の研究では高学年の総合的な学習の時間を使って実施することを想定し、このモデルを作った。今後は低・中学年の国語科等の学習を活用しながら系統的に実施できるカリキュラムを構想し、提案していきたい。メディア・リテラシー教育のさらなる普及・定着に寄与できるものと考えている。

〔参考文献〕

- 菅谷明子(2000):「メディア・リテラシー - 世界の現場から - 」,岩波書店
- 堀田龍也(2001):「新しい時代の基礎基本としてのメディア・リテラシー」,子どもの学力読本,教育開発研究所,pp.43-46